

早池峰神楽「面の舞」が 舞手にもたらしたもの

近藤洋子

はじめに

岩手県稗貫郡大迫町に古くから伝承されている早池峰神楽は別名山伏神楽とも呼ばれ、地元の人々の楽しみとなっているばかりでなく、日本全国は言うに及ばず、海外からも見学に訪れる程の神楽で、重要無形民俗文化財として第一番目に国指定を受けている。この神楽の指導を受け27年が経過し、数々の演目の中より、本校の教育現場に取り入れられたものは、神楽（しんがく）、烏舞、◎翁舞、◎三番叟、八幡舞、鞍馬、◎普将、◎天照五穀、水無月、◎天女、◎天降り、であった。◎印は、面を使用する舞である。神楽自体がむずかしい上に面を付けるのであるから、その機会を得た者はそう多くはない。その体験者16人に、筆者自身の体験に基づいて作成したアンケート調査を実施し、面を使用した舞がどのようなことを舞手にもたらしたか、またその魔力についても迫ってみたい。

調査方法 ※ 当日配布資料参照

○対象は過去に面を付け本番を経験したことのある現役学生及び卒業生16名。

○アンケート項目は全8項目。なるべく文章表現をもって答えてもらった。

結果と考察 ※ 当日配布資料参照

1. 何才の時、何演目を、何回経験したか：

20～25才の間にほぼ全員が三番叟を経験。この舞は神楽の登竜門としての位置付けにある。過半数の者は三番叟しか経験していない。三番叟以外を経験したものは5名である。最多7回の経験をもつ25才の男性は、普将（最も激しい舞）と天降り（猿田彦の役割）を経験している。すべての舞の内容について詳しく述べることは省略するが、大別すると、女舞、荒舞に別れ、荒舞が激しく跳び旋回するのに比べ、女舞はゆるやかな動きで構成される。一演目の所要時間は13分から40分程となっている。

2. 始めて面を付けて舞った時の実感：

多くの者が視界が不自由で踊りにくかったこと、方向、平衡感覚がなくなったこと等一種のパニック状態を述べているが、素顔が隠れたこと等で、大胆になれ伸び伸びできた、と述べた者もいた。

3. 始めての舞が終了した時の心身の状態：

疲れを訴えた者、ホッとした者、冷静に反省が出来た者、欲求不満だった者等それぞれの体力、

個性等に応じた答えだった。

4. 回を重ねて変化したこと：

いずれの文からも視界の不自由さの訴えはなくなり、○内に集中し内から把握できる余裕が生まれた。○バランスを崩さなくなり、神楽に集中出来る快感を覚えた。○手足が溶けて記憶がとぶようになった。○もっともっと面を付けて踊りたいもっと深い向こうの世界に行きたい、等と、次第に心引かれていく様子が見られた。

5. 面を付けることに関して考えたこと：

○基本姿勢（腰を入れ低くなる）の大切さ、必要性を知った。○普段あまり表出しない感情、行動が出やすくなる。○人間は本来の姿を表現するために隠す。面を付けた舞は、その人の姿を写し出す気がする。○身口意一体の仏教的作法と同じであると感じた。ただもっと地に根差した（山のパワー）ところが異なる。○舞い手の内に向かってある独特な作用を及ぼす状況へ追い込む。それは言語に尽くせないものではある。○舞い手がより深い世界に降りていくための媒体だと思った、等と、普段味わえない世界へと誘われていることが伺える。

6. 視界、呼吸について（具体的設問の答え）

○視界について「とても不自由」とほぼ全員が答えたが、呼吸については「少し不自由」が多く「とても不自由」の回答は少なかった。○それぞれの解決の具対策として、視界については、耳に聞こえる音、わずかの視界、自らの身体を頼りにし、呼吸については、打つ手がない、呼吸を忘れた（れる）、自然に任せたとの回答が得られた。いかに視覚が重要かを表わし、その時自ずと正しい姿勢をとろうとしていることがわかる。呼吸はほとんど無意識に行われている様子である。

8. 今度舞う時はどんな注意をしますか：

○練習の時から面を付ける。○自分で面を付ける。○しっかり練習を積んでおく、等々、体験に基づく心構えが述べられている。

まとめ

貴重な体験を8項目にわたり調査した結果、視界がゼロに等しく、呼吸もままならない状況におかれた舞い手は、太鼓、笛等の音や、わずかに見える幕等を頼りに、必死に面の役割を果たす努力をする。その時、日頃指導を受けている正しい姿勢、動き方へと近づいていく。腰をいれ、身体を低く保ち、中心軸を垂直に保ち、余分の力を抜いた末端部でバランスを取りながら激しく跳び、旋回できるように集中する。そして回を重ねると徐々に楽にできるようになり、普段では経験できない奥深い世界を味わえるようになっていく。本物になれる日を追い求めて。それは生涯をかけても悔いのない価値ある挑戦である。